幸せは現在に生きること―キルケゴールの幸福論

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

音楽と音楽的文体

バッハのオルガン曲には、天上から鳴り渡るような荘厳な響きがある。バッハが生涯を通じて心に描き、音楽を通じて表現しようとしたのは、神による救いと神への賛美だった。彼が死の床にあった時、「（天国に行けば）これまで夢にのみ描いていた音楽を聴ける」と妻に語っていたという。この世に別れを告げても、天国の音楽を聴くことができる。バッハはこれを最後の楽しみにしていたのだった。彼は果たして天国でどんな音楽を聴くことができたのだろうか。

一方、キルケゴールは音楽を人間の感性的・エロス的生き方と等置した。彼はこの生き方を、「直接的、エロス的な諸段階、あるいは音楽的＝エロス的なもの」（『あれか、これか』第１部）の中で、モーツァルトの歌劇に即して論じている。しかし彼は、バッハをはじめとするキリスト教音楽については何も語っていない。音楽は感性に訴えるところが最も大きな芸術であるが、感性を通じて精神（霊）に訴えるがゆえに宗教音楽が成立するものなのに。キルケゴールは音楽についてはかなり片寄った見方を持っていたようだ。彼に言わせれば、これはあくまで偽名著者の一人ヴィクトル・エレミタが編集したＡなる人物の見解だと、煙幕を張るのかもしれないが…。

キルケゴール自身がなにか楽器が弾けたとか、歌が上手だったとかいう伝記的報告はない。しかし、その著作がきわめて音楽的な文体なのは、多くの人々が指摘するところである。流れるような文章の中で、主題がさまざまに変容されて展開し、それは読者の理性に訴えるというよりは、むしろ感性により強く訴えてくる。このような音楽的文体の思想家には、他にはロシアの亡命哲学者のニコライ・ベルジャーエフがいるぐらいだ。

「野の百合と空の鳥」についての講話

キルケゴールの数多い著作の中で、一般に「建徳的講話」と呼ばれる教化的なキリスト教講話群がある。彼はこれらをすべて実名で刊行している。キリスト教の教えの真髄を読者に直接語りかけて説くという直接伝達の性格も与（あずか）って、とりわけ最も音楽的な文体であるのが、これら教化的講話群である。

キリスト教講話だからといって敬遠する向きもあるが、先入観無しに読むことを、私はぜひお奨めしたい。それぞれにきわめて感銘深い講話ばかりであり、なかでも白眉は、「野の百合と空の鳥」に関する一連の講話である。これらはいずれも、マタイ伝福音書の「山上の説教」中の聖句（第６章 24 ～ 35）を踏まえたものだ。1847 年の「野の百合と空の鳥から何を学ぶか」、1848 年「異邦人の思い煩い」、1849 年「野の百合と空の鳥」と、３つの講話が連続して刊行されている。

聖句によれば、野の中にあって自ら美しく装っているのが百合の本来の姿、空の下で自由に飛び回るのが鳥の本来の姿である。彼らこそ、思い煩う人間にとって偉大な沈黙の教師である。最も高い完成度を持ち、最も深い宗教性が感じられるのは、1849 年の講話であり、キルケゴールの『野の百合と空の鳥』と言えば通常これを指す。しかし、上記３つの講話の中で、最も豊かな文学的な香気が感じられるのは 1847 年の「野の百合と空の鳥から何を学ぶか」である。この講話では、人間であることに満足することの大切さ、人間とは素晴らしい存在であること、そして人間に約束されている幸せという、３つの主題に分けて話が説き起こされている。

アンデルセンを思わせる童話

このうち、「人間であることに満足することの大切さ」という最初の主題について、キルケゴールはちょっとした童話めいた挿話を講話の中に挟（さしはさ）んでいる。

それは、あでやかな王冠百合に憧れる一本の百合、餌を与えられている家鳩を羨む一羽の山鳩の話である。彼らはいずれも自らに満足せず、自他を比較することによって身を滅ぼしてしまう人間の喩えとして登場する。この百合は小鳥に唆（そそのか）されて、多くの自分の同類たちが咲き乱れている場所に行きたいと願った。そこで、嘴で根から抜いてもらい、翼の上に乗って、その場所に連れていってもらおうとする。そこに行けば自分も王冠百合になれるのだ。しかし、百合は運ばれている途中で萎れて死んでしまう。その山鳩は、家鳩の境遇を羨ましく思い、農夫の庭にある鳩舎の中に翔（か）けこんでいった。こうすれば自分も毎日餌を与えてもらえるのだ。しかし、山鳩は目敏（めざと）い農夫に見つかり、彼だけ別の小さな箱に移されて翌日殺されてしまう。彼らはどうして今自分が置かれた野原、空の下で過ごそうとしなかったのか。人間も同じことである。我々はみな神の被造物であり、我々を養い得るのは神だけなのである。それゆえ、明日のことを思い煩うことなく、神の許で今日与えられたこの一日を生きなさい、と。

このときの百合や山鳩の描き方は、アンデルセンの童話を彷彿とさせるものがある。キルケゴールは彼の童話を読んでおり、それに触発されて自分も童話ふうに描こうとしたのかもしれない。両者は同時代人であった。アンデルセンは小説家として有名になりたかったが、結果として有名になったのは童話作家としてであった。キルケゴールも小説や詩を書こうとした時期があったが、彼の文才は結果的に教化的講話の中で発揮されたのであった。

幸せは現在に生きること

人間にとって本当の幸せとは、自らが神の許で現在的にあることに尽きる。「野の百合と空の鳥」の一連の講話が目指す結論はこれなのである。まだ来ない明日の労苦を今日思う煩う必要はない。それは無益であり、不幸なことである。逆に言えば、人間的にどんなに苦しい時や死に瀕した時であっても、自らが神の許で現在的にあるとすれば、その人は幸せなのである。この幸せ観は、とりわけ未来への思い煩いに満ちた現代人に新鮮な感動と深い教訓を与えてくれる。キルケゴールの講話は、こうして幸福論として読むことができるのである。

バッハは死の床にあって、まもなく天国の音楽が聴けることを楽しみにしていた。彼はその時すでに天国に、神の許にいたのである。そして、この世に別れを告げて本当に天国に来たとき、彼はどんな音楽を聴いたのだろう。もしかしたらそれは彼自身の曲だったのかもしれない。